

温泉発見伝説と動物

—岐阜県下呂温泉の三つの祭りと伝説—

菱 川 晶 子

1 先行研究と本研究の位置づけ

世界の中でも有数の温泉国である我が国では、多くの温泉地に温泉発見の経緯や由来を語った伝説が伝えられている。この温泉発見伝説は民俗学でも早くから注目を集め、最も早いものでは高木敏雄が『日本伝説集⁽¹⁾』の「縁起伝説」に取り上げている。また柳田國男も『山鳥民譚集⁽²⁾』や『日本伝説名彙⁽³⁾』等で動物名の付いた温泉とその由来について記し、白鷺や鹿等は古来霊物であり、神主や僧侶が発見者の場合には土地の神仏の使者伝令とされるのは当然のことだと述べている。

一方、『温泉大鑑⁽⁴⁾』の中で「温泉の信仰と伝説」を記した宗教学の加藤玄智と宮坂光次は、「発見伝説」を内容によって詳細に七分している。すなわち「獵師・樵夫・亡命者等によって発見された温泉」、「鳥獸に教えられて発見した温泉」、「神仏に導かれて発見した温泉」、「高僧に発見された温泉」、「偉人に発見開湯された温泉」、「山姥・天狗等変化物の湯」、「温泉の冷却と移動に関する伝説」である。そして「鳥獸に教えられて発見した温泉」では、鳥獸等にも、自然泉や温泉をめがけて集まり、好んでこれに浴する風習のあることは、まぎれない事実であると述べ、信心深い昔の人はそれを鳥獸の習性とは考えずに神仏の使者や化現と考えたと指摘している。

この動物の習性の指摘に通じるのが、温泉医学の立場からの甘露寺泰雄等の研究⁽⁵⁾である。動物の生活や慣習が温泉の泉質に関係しており、動物発見を説いているのは塩類泉が最も多いというものである。より両者の関係の実態にせまるものといえる。これらを鑑みると、温泉地における動物の行動を神仏と結びつけて理解しようとする働きにこそ、人間らしさが垣間見えるように思われる。

その後も山口貞夫の四分類⁽⁶⁾を始め、いくつかの分類案が示されてきたが、それらには共通して「動物が教えた」、あるいは「導いた」とするものが必ず入ることから、動物の関わる伝説が温泉発見伝説の中でも重要な位置を占めているとみて間違いのないだろう。筆者はこの温泉発見伝説と動物との関係をみていくことで、動物に対する人々の思考の歴史の一端が明らかになると考えている。

筆者がこれまでに確認したものの中には、一つの温泉地で複数の異なる伝説が語られている場合があった。また長野県の鹿教湯温泉のように、現在人々に親しまれている温泉名が後の時代に改称されたものであり、それに伴って伝説が新たに生成されていることもあった⁽⁷⁾。一方で、今の温泉名の他に伝説にちなんだ別の名称が古くは存在したという例も少なくない。動物名を冠する温泉へ、あるいは逆に動物名を伴わない温泉へと、温泉の名称もそれぞれの地域の歴史や事情によっ

て揺れ動いているようだ。

自然からの恩恵である温泉を享受するため、これまでに多くの浴場が開かれてきた。人々は、大地の恵みであるが故に湯の枯渇を恐れ、また利用者の増減に影響を受けながらも、営みを続けている。そのような温泉地の様相は発見伝説にも大きく関わるものであり、温泉地毎の個別の分析が肝要となる。

本稿では、数年来調査を進めてきた岐阜県下呂市にある下呂温泉を取り上げたい。下呂温泉は飛騨の中でも南部に位置し、その中心にある湯之島は益田街道沿いにある宿場の一つだった。川原で傷を癒す白鷺によって温泉のありかを知ったという伝説は、今も町の随所にそれを感じさせる形で表されている。

下呂温泉についての研究では、科学的な側面からの温泉研究や、観光産業およびエコツーリズムに注目した研究がなされてきた。本研究に最も近いものでは、下呂温泉の歴史的発展過程について述べた森川敏育の論考⁽⁸⁾があるが、温泉発見伝説については簡単に触れるに留まっている。他文献での祭りについての扱ひも、森水無八幡神社の田之神祭を除

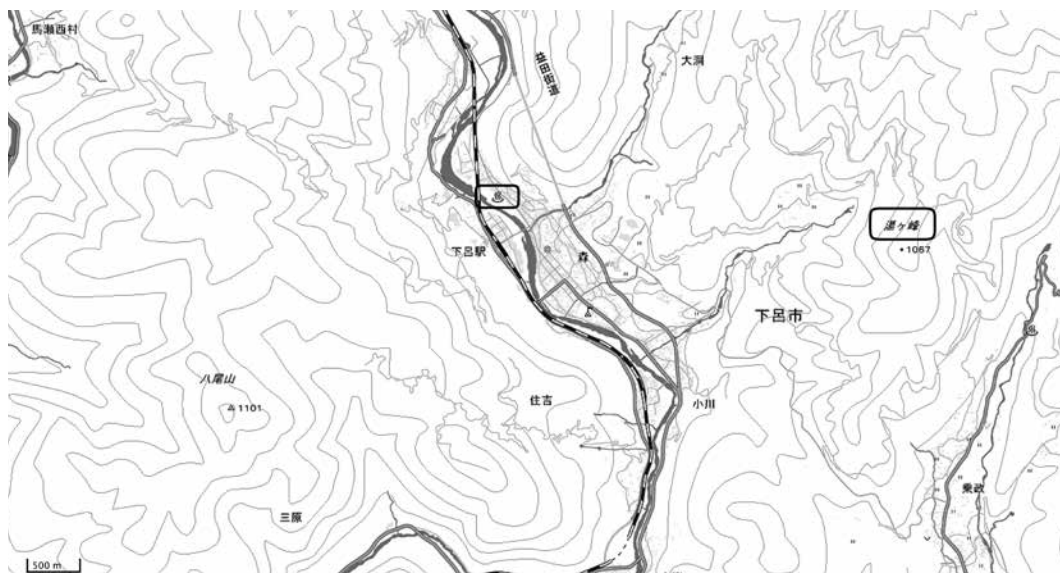
くと皆無に等しい状況にある。このため本稿では、温泉発見伝説を中心に、それらにちなんだ祭りが人々の手によってどのように伝えられ、また新たに生み出されているのかを探っていくことにする。

2 下呂温泉の歴史と温泉発見伝説

(1) 下呂温泉の地勢と歴史

下呂温泉のある下呂市は岐阜県の中東部にある。旧益田郡^{ましたぐん}の中では南部東方に位置し、飛騨の入り口ともいえる場所になる。東は長野県と中津川市に接し、西は郡上市や関市に、南は加茂郡、北は高山市に隣接している。標高 3,067m の御嶽山など千メートルを超える急峻な山並みが続き、河岸段丘のわずかに開けた平地を中心に市は作られてきた。乗鞍岳の南麓から発した飛騨川はやがて益田川となって市の中央を南北に貫流し、その川沿いには益田街道が通り、現在ではそれに並行するように JR 高山本線や国道 41 号線が走っている。

山林が全体の約 9 割を占めている下呂市



下呂温泉周辺図（国土地理院の地図データを元に一部加工）

は、萩原町、小坂町、下呂町、金山町、馬瀬村の5町村が平成16年(2004)に合併して誕生した。続いて、下呂温泉のある旧下呂町についてみていこう。

町の中央部からよく見える標高1,067mの湯ヶ峰は、山肌の覗く大崩れが特徴で、市街地に向いた西側斜面に荒々しい岩肌が現われている。昔からその地肌の色で翌日の天気を占う風習がある程⁽⁹⁾、地域の人々に親しまれてきた山である。湯ヶ峰はおよそ10万年前に噴火した火山であり、地下のマグマが下呂温泉の熱源であると考えられている。この峰一帯で産出される湯ヶ峰流紋岩は、縄文時代以前から石器の材料として使われてきた歴史を持ち、古くから人々の暮らす土地だったことがわかっている⁽¹⁰⁾。

現在湯が湧き出すのは湯之島と呼ばれる地域が中心だが、周知の通り、この湯は広く下呂温泉の名前で親しまれてきた。ではこの温泉名は何に由来しているのだろうか。その答えを求めると、古代まで遡ることになる。

中央政府から国府をつなぐ官道の一つであった東山道の飛驒支路の^{とうきんどう}飛驒^{えき}支路^{えき}の^{しもつとまりのうまや}下留^{かみつとまり}駅があった。『続日本紀』宝亀7年間(776)10月の条には、美濃国菅田駅と飛驒国大野郡伴有^{あり}駅は、その間が七十四里ある上道が険しいため、中間に一駅を置いて、その名を下留とした旨が記されている⁽¹¹⁾。その場所は旧益田郡下呂町に当たる地であり、これに伴って伴有^{あり}駅の名称も上留^{かみつとまり}駅に改められることになる⁽¹²⁾。後から加わった駅ということもあり、上と下それぞれの留という名になったものと考えられる。そしてこの道はやがて、飛驒の国主となる金森長近の切り開いた道なども加わって、越中まで抜ける重要な道の一つになっていく⁽¹³⁾。その後下留一帯は下留郷と称されるようになり、明治6年に書かれた『斐太後風土記』にも、「しものとまりのごう」のルビが付されている⁽¹⁴⁾。19世紀初頭にこの地を測量に訪れた伊能忠敬の地図には、「世

曰下呂」や「湯之島村」などの名称が記されている⁽¹⁵⁾が、「世曰下呂」という表記を取っているのは、地域の人々に下呂と呼ばれていることを示しているのだろう。また、湯之島村には伝馬のための馬継場が明治維新までおかれ、湯之島宿は下呂宿と呼ばれることもあったようだ⁽¹⁶⁾。

現在の下呂温泉の泉質はアルカリ性単純温泉とされているが、以前は塩類泉や無色透明無臭の塩類性硫黄泉だったともいわれ、リウマチ・皮膚病・胃腸病などに効能があると謳われていた⁽¹⁷⁾。これは後にも触れるが、湯の集中管理によって泉質にも若干の変化がみられたようである。

下呂温泉の湯は、延喜年中(901～923)に「飛驒國下呂の温泉始て湧出すと傳へらる」と『飛驒編年史要』に記され、また天曆年中(947～957)の湧出とする史資料もある⁽¹⁸⁾。いずれにしても、10世紀の湧出と考えられているのがわかる。

下呂温泉は日本三名泉に数えられているが、そのきっかけを作った人物は、下呂温泉への来訪者でもあった万里集九だろう。万里集九は室町時代中期の禅僧であり、漢詩人である。寛正4年(1463)に京の相国寺の友社に入り、思僧達と交遊する中で作った七巻本からなる漢詩集が、「梅花無尽蔵」になる。その中にある「温湯連句序」には、「本邦六十余州。每州有靈湯。其最者下野之草津。々陽之有馬。飛州之湯島。三処也。」との記述が認められる⁽¹⁹⁾。全国にある靈湯の中でも、下野の草津、津陽すなわち摂津の有馬、そして飛州は湯島が最たるものとして綴られているのが、今日天下の三名泉の一つとして下呂温泉が広く知られるようになった嚆矢と地元でも理解されている。

また、江戸初期の儒学者である林羅山の詩集にも、ほぼ同内容の記述が確認できる。「有馬山ノ温湯」を見ると、「我國諸州温泉多ク有り、其ノ最著ル者ノハ、摂津之有間、下野



図 1. 伊藤梵陽編「下呂温泉案内」(明治出版社、昭和4年(1929)岐阜県図書館蔵)の鳥瞰図(部分)。図の中央奥に御嶽山が聳え、手前の湯之島に建つ温泉寺、2つの浴場のある温泉町、益田川といくつかの橋やげろ駅等が色鮮やかに描かれている。春の景色か。川中の岩のあたりに記されている湯ヶ淵は、白鷺が飛来した場所と伝わっている

之草津、飛驒之湯島、是レ三処也」とある⁽²⁰⁾。草津温泉と有馬温泉の順が逆になっているが、やはり三大温泉の中に飛驒湯島の名前が認められる。林羅山は、徳川家康から家綱までの四代にわたって侍講として徳川家に仕えた人物でもある。その羅山が挙げた温泉地への影響力は、より大きなものだっただろう。明治18年(1885)に衛生局によって刊行された『日本鉱泉誌』の下呂温泉の項には、林羅山のこの一文が掲載されている⁽²¹⁾。

続く長谷川忠崇執筆の『飛州志』にも同様の記述があった。忠崇は、飛驒国代官を務めた人物であり、徳川吉宗の内命を受けて本書を記したといわれている。長谷川忠崇は公務のかたわら家族の協力を得て四年余りで本書を脱稿するが、吉宗の死や自身の病氣、また死去によってこれがすぐに公になることはな

かった。死後およそ七十年を経た文政12年(1829)になって、ひ孫に当たる一陽が校訂と浄書をして、ようやく幕府に献納されている。

そのような経緯のある『飛州志』だが、享保年間に執筆されていたことを考えれば、18世紀半ばの当地の様子を伝える書と理解しても差し支えないだろう。本書の「下呂ノ温泉」の冒頭には、温泉についての説明の後に、先の一節に近い次の一文がある⁽²²⁾。

「同郡同郷湯ノ島村ニアリ、本朝上古ノ温泉三処アリ、所謂播州有馬、野州草津、飛州湯島是也」と記され、さらに末文には、「今有馬草津ハ広く世ノ知ル処ナリ。湯ノ島ハ、古来ノ靈湯タルコト遠クシルモノ少シトイヘトモ、入湯スル人ハ其験ヲ得ザルコトナシトナリ。」とある。有馬と草津の温泉に比べて



図2. 温泉街湯之島全景（「下呂温泉絵葉書」岐阜県図書館蔵）年代は不明だが、湯ヶ峰の崩落した岩肌がよく見える

知名度が低く、古来の霊湯だとはあまり知られていないが、湯ノ島に入湯した人にはその効能のすばらしさが理解されると考えていたのがわかる。

今も「湯の河原」や「湯平」の字名のある湯之島⁽²³⁾だが、18世紀当時の村の様子を『飛騨國中案内⁽²⁴⁾』からみてみよう(傍線は筆者)。

湯之嶋村 高百三石四斗四升一合、内田高四十三石四斗二升三合、畑高六十石一升八合、此反別十二町四反六畝十七歩あり、内三町九反四畝三歩田方、八町五反二畝十四歩畑方なり、平地にあらず候へとも地面は能き所なり、上田十五・中十三・下十一・下々八・砂田六、上畑十一・中九・下七・下々四・砂三、屋敷十一の位、高に三ツ五分一厘、家数大・小五十二軒、内寺一軒あり、中呂村禪昌寺末寺にて【医王山温泉寺】といふ、此境内五畝十歩、高一石九升七合境外なり、此反別二反一畝十四歩是は畑方なり、開基年数不相知候、金森法印公よりの除地なり。宮森有り【若宮八幡宮】此境内二反二十五歩【神明宮】此境内一反三畝十歩あり、湯之嶋村は宿場なり、此宿下タ大川の水辺川原に名湯の【温泉】あり、依之村名を湯之嶋と号る、偕此温泉の場所、元來は同郷の内小川村の奥、谷合より出候処に、四百三十年以前より只今の川原へわき出る由、右谷合の所、只今は其所大元



図3. 現在の湯ヶ峰. 植林が進み, 岩肌はあまり目立たなくなっている

罷成候、字則【大はげ】といふ、名湯故方々より入湯のもの多く有之繁昌いたす、此村に【郷藏】一ヶ所あり、高二斗七升五合、此反別二畝十五歩あり、是は収納組の百姓普請いたすなり、外に家一軒あり、是は【猿引】か居る、この次には谷川あり、則板橋一ヶ所有り、橋長六間半、巾九尺、字【あた野橋】といふ、是は御入用橋なり、此次に一ヶ村あり、森村といふ、此間五・六町あり、平地にて道吉し。

田よりも畑の方の収穫量が若干多く、平地ではないものの湯之島の地面はよい所だとある。しかし適した土地が少ないこともあり、周辺の村々に比べるとそれ程多い収穫量ではない。

家屋が大小含めて52軒あり、温泉寺や若宮



図4. 湯ヶ峰方面を見た町の様子. 益田川の左側が湯之島になる



図 5. 浴場白鷺之湯前に立つ「日本三名泉発祥之地」の石碑

八幡宮についての記載もある。この52軒には、何軒かの宿も含まれているのだろう。旅籠が湯宿も兼ねていたようだ。宿場である湯之島村の大川の川原には温泉が湧き、名湯のために多くの人々が訪れ繁盛している様子も窺える。しかし、湯に浴するためには砂や石を掘り出す必要があり、できた窪地に湯が溜まるのを待つ仕組みだったようだ。やがて木枠を組んだ湯床へ湯道から湯を引くようになっていく⁽²⁵⁾。

猿引の家が一軒あるのも、人の集まる温泉地ならではのだろう。浴客を相手に猿の芸を披露する姿が想像できる。また、かつての湧出口が「大はげ」の字名を持っているのは、崩壊した山肌の露出を指していると思われる。当時の益田郡下呂郷は、湯之島、森、小川、少々野、三原、門原の6ヵ村からなっていた。

その後明治期になると、浴舎は32戸になり、川岸に円形の浴槽が二つ置かれている。温度は118度とかなりの高温だが、川水が混入することもあったようだ。浴客が平均して一年あたり1,133人⁽²⁶⁾というのは、川の氾濫で浴槽が水没する被害が往々にあったことも関係しているのだろう。江戸後期から明治にかけて、下呂温泉は苦難の道を進むことになる。

(2) 苦難の歴史

温泉は永く湯之島と幸田のものとして利用

され、この地域の村人の入浴は自由だった。湯治客への営業で成り立っていた湯之島だったが、村人すべてが温泉営業を行っていたわけではなかった。江戸時代を通じて、川原の湯の利用や宿屋などの営業権は湯番と呼ばれており、これは湯之島村に耕地を持ち年貢を納める本百姓の特権と意識されて守られてきた⁽²⁷⁾。

そのような湯屋仲間が中心となって、湯壺の整備や湯宿の確保、湯治場への道の整備、湯治客向けの集落内整備が行われ、温泉営業の持ち株に応じて湯番の日数が割り当てられた。その日数によって利益の配分も受けることができた。「湯治客の滞在は七日ひとまわり」ともいわれ、できものに卓効があると知られた湯は、比較的長期の滞在の客が多かった。天明年間(1781～89)から天保年間(1830～43)にかけての湯之島の客数は、年間26,000人から30,000人と賑わいをみせていた⁽²⁸⁾。少し遡る宝暦7年(1757)に新設された温泉役では、平湯や神坂村(蒲田温泉)に対して、場所もよく繁盛していることから、湯之島には3倍以上の500文が課されている⁽²⁹⁾。

しかし、川原に湧く湯の宿命なのか、泉源は川の増水や氾濫によってすぐに姿を消した。天明元年(1781)には大洪水が起き、益田川の右岸側にあった本流は左岸側に移ってしまった。

文政8年(1825)には川原の浴場は壊滅し、湯壺も川の中に埋没してしまう。その後復旧工事によって湯道が掘り当てられ、天保3年(1832)には新たな温泉場が作られるが、再び天保7年から翌8年(1836～37)にかけて度重なる洪水が発生し、川の本流はさらに左岸へ寄り、温泉場も含めて川原はすべて水没してしまうのである。同年には水没した泉源の探索が何度も試みられたが、見つけることができないまま、明治初年までの約30年間にわたって、町は温泉の出ない状態が続く⁽³⁰⁾。

温泉による諸種の営業に養蚕業や農業、さらに山林原野の利用によって成り立っていた湯之島村⁽³¹⁾にとって、温泉に関わる主要な収入が得られないことは、死活問題だったに違いない。

時代は明治になり、同9年(1876)に泉源が偶然発見されるものの、それが右岸の幸田区側にあったため、湯之島と幸田の間で温泉営業をめぐる争いが起こる。結局湯之島側が権利を得ることになるが、また明治29年(1896)に大洪水が起こり、本流が右岸寄りとなり、幸田側の泉源が水没するなどの苦難が両地区共に続いたのである。

このような歩みの中で、確かな泉源が求められたのは自然なことだろう。しかし、湯之島地区にはすでに経済的な余裕はなく、大正期になると温泉掘削のために外部資本との提携が進められた。しかしながら、ボーリングによる開発は失敗に終わり、この出来事が温泉権の所有は湯之島地区民にあると再確認させることになる。

その後は区民自らの開発が成功し、大正13年(1924)に現在の一号源泉の地で泉源を掘り当てることができ、2年後の大正15年(1926)には、ようやく共同浴場の薬師の湯と白鷺の湯の二つが開かれたのだった。しかし、事業の継続のための資金が不安定なこともあって、昭和期に再び外部資本の導入と近代的な温泉開発が試みられることになる。この外部資本の相手が後の湯之島館を創業させることになる人物であり、同じ頃に幸田地区に進出してきたのが、森地区での温泉掘削権を得た水明館の創業者だった。山の湯之島館と川の水明館は外部からの参入だったが、その後の下呂温泉の発展において重要な存在になっていく。

二つの旅館が共に独自の温泉源を所有し、内湯を持っていたこともあって、他の旅館も次第に外湯から内湯へと大きく変化していく。昭和41年(1966)までの間に55本の泉

源が掘削されると、急激な下呂温泉の発展と乱開発による温泉の枯渇が始まり、湯の温度の低下現象もみられるようになる。

そのような経緯もあって、昭和49年(1974)には下呂温泉事業協同組合による80本の泉源が統括され、湯の集中管理事業が開始されたのである⁽³²⁾。湯の安定した供給は温泉地には必須のことであり、下呂温泉で湯の変わらぬ湧出が特に祈念されたのは、必然のことだったのかもしれない。

(3) 温泉発見伝説の変遷

下呂のあたりが古く縄文以前から人々の暮らす土地だった点については先に触れたが、温泉の始まりについてはこれまでどのように記され、また語り継がれてきたのだろうか。順にみていこう。

最も古い記録は、記されている年号に従えば温泉寺所蔵の巻物「湯文之事」になる(図6)。巻末には文永2年と書かれており、これは西暦1265年に当たる。紙面の都合上、現代文にして要約を載せる。

①「湯文之事」要約(医王山温泉寺蔵⁽³³⁾)

(傍線は筆者。以下の引用資料も同様)

大日本国飛騨郡路益田郡下呂温泉は、元は薬師如来の本性である。古くは里より辰の方へ一里隔てた山の絶頂にあり、煙が立つ様は富士や浅間のように、石が焼け、草木は生え



図6. 「湯文之事」(温泉寺蔵)

なかった。その跡を今は湯峯と呼ぶ。

諸方から多くの病人が登り、湯に触れると万病がことごとく治癒した。しかし険路に苦しんでいたところ、如来の効力によるのか、湯は一夜にして川端へと移された。このため益々諸国から僧俗男女が訪ねてきて信仰し祈願した。腫れ物や痔瘻、切り傷や打身などのほか、外科の治療や薬の効かなかった者にまで効果があった。但し癩病の類や婦人の病の場合は避けた方がよい。

この湯に入れば体の状態は正され、心も安らかになるだろう。貴賤や身分、老若の隔てもなく争いをやめ、心を素直にして互いに病気をいたむべきである。来るときは馬や駕籠に乗っていた人も歩けるようになり、また人々は病を忘れて帰って行った。もし思うように病気が平癒しない場合にも諦めず、病について里人に尋ね、旅費に困る時も助けを乞うべきである。父母の肉身を分け、仏と同じ人身を受けながら、自らの誤りで病になるのは、あるまじきことだ。寿命の有るうちは健康に過ごし、仏神に深く信仰すれば、自ずから心身健やかになり、この世とあの世のご利益を得ることができるだろう。今日明日も定かではない身、決して悪い道に入ることがないように。

于時文永三年乙丑十月

下呂温泉にまつわる縁起である。温泉が「元は薬師如来の本性」というのは、元々は人々を救済するために現われた薬師如来そのものだったという意味だろう。内容は、そのように強く結びついた湯と薬師如来の霊験、湯に向かう際の心得や湯の効能、信心の大切さ、またあるべき生き方についてわかりやすく説かれている。生き方の指南書ともいえる。主に病を得て湯に集う人々に向けて書かれているのだろう。

元々は山の頂上に湯が湧き出し、万病に効くその湯を求めて多くの病人が集まっていた

が、道が険しく大変な苦勞をしていたところ、薬師如来の効力によるのか、一夜のうちに湯元が川端に移されたとあった。「湯峯」と呼ばれていた現在の湯ヶ峰には、頂上に近い湯の平に湯の湧出場所と伝わる湯壺跡が残されている。湯ヶ峰のある旧小川村に薬師如来が祀られているのも、この湯の存在と関連するようだ。同地には「湯屋街道」や「湯薬師」の地名に加え、「湯屋」や「別荘」などの屋号が伝えられている⁽³⁴⁾。

冒頭に「下呂温泉」の名が記されていたが、先述のように温泉が長く「湯島」や「湯之島」と呼ばれていたことを考えると、末尾の文永2年(1265)の年号には少し違和感を覚える。「下呂」の文字は、「下呂郷」の形で応永年間(1394～1428)に記録があるとの指摘がある⁽³⁵⁾が、それよりもさらに遡ることになる。果たして文永2年当時にこの温泉名が認知されていたのだろうか。

本文中には特に時代を特定する年号は記されていない。歴史ある薬師如来と湯の効能について知らしめるために、後の時代に書き記された可能性も考えられる。

時代は下って、先にみた江戸時代中期の『飛州志』にも湯の湧出についての記述がある⁽³⁶⁾。次の通りである。

②『飛州志』

国説ニ云ク、天曆年中此地ノ山中ニ初テ温泉湧出セリ。地名ヲ湯峰ト云。然ルニ文永二年(1265)乙丑冬十月、湯峰ノ温泉出止テ、山下今ノ地ニ湧出セリ。是則益田川ノ河原ニシテ、常ニ温湯ノ湧出ルニテハナシ、入浴セントスルトキハ河原ノ砂石ヲ除キテ、僅ニクボメヌレバ其処ニ総テ温湯出ルナリ。尤清泉タリ。猶其河水ニ近キ処ハ甚熱湯ナリ。然レドモ、其河水ニ於テハ曾テ温湯ノ気味ナシ。又此地ニ温泉薬師ト称スル霊像アリ。口碑ニ伝フル処、文永年中温泉此地ニ湧出セ

シトキ、湯ノ島ノ樹下ニ於テ光アリ。村民アヤシミテ其光明ヲタツネ行テミルニ、薬師ノ尊像ヲ得タリ。故ニ一字ノ草堂ニ安置シテ、温泉薬師ト称セリ。然ルニ寛文中、同郡萩原郷中呂村龍沢山禅昌禅寺第八世剛山祖金和尚此地ニ於テ一寺ヲ建立シテ彼靈仏ヲ安置ス。医王山温泉禅寺ト称セリ。

国説によれば、天暦年中に温泉がこの地の山中で初めて発見されたという。それが310年余後の文永二年（1265）十月に湯が止まり、山下の今の地に湧き出したという。何かのきっかけで突然湯が止まり、新たな場所から湧き出すというのは、それ程不思議な現象ではない。「湯文之事」では薬師如来の御慈悲で人々の通いやすい場所に泉源が移動したとあったが、本書では河原に湯が湧き出した時に薬師如来像が発見されたという伝承が伴っていた。あからさまではないものの、湯の移動が同時に発見された薬師如来によるものと、暗示しているのがわかる。

湯は、益田川の河原で常に湧いているわけではなく、入浴する際に河原の砂石を除いて、窪みを作るとそこに湧き出てきたようである。きれいな湯で、河水に近いところは熱湯だったが、河水自体は湯ではなかったともある。情景が思い浮かべられるようだが、ここで注目されるのは「文永二年十月」の年号だろう。「湯文之事」にはなかった、泉源が移動した年月として記されている。また、温泉が初めて湧き出したのが「天暦年中」とも明記されている。

「国説」が具体的に何の史料を指しているのかは不明だが、先の「湯文之事」に記された年月を元にして、湯の停止や泉源の移動の年代が設定されているようだ。執筆した長谷川忠崇自身が、「湯文之事」は湯の大きな変化の年に記されたと考えたかどうかはわからない。温泉寺関係者の説明によるのかもし

れない。しかし少なくとも、二つの年月の一致に何らかの関係があるのは間違いないだろう。伝承に基づく薬師像の感得や草堂への安置、さらには17世紀後半寛文中の、萩原郷中呂村龍澤山禅昌寺第8世による温泉寺の創建も記され、整った内容となっている。同市内の萩原町にある臨済宗妙心寺派の禅昌寺から寺の初代を迎えた温泉寺は、今も禅昌寺の末寺として強い繋がりを持ち続けている。温泉寺創建に当たっては、土地の寄進も含めて長く名主を務めていた武川家の力が大きく働いたようだ。

また、寺の創建以前に薬師如来が安置されていた草堂は、湯島薬師堂と呼ばれて小型の梵鐘も存在したといわれている。その鐘銘には「永正4年（1507）7月2日」の日付が刻まれていたのが確認されており⁽³⁷⁾、遅くともこの時代に薬師堂が実在していたのがわかる。

次にみるのは、「飛州下呂温泉畧縁記」（以下畧縁記）である。制作年代不詳の木版の刷物で、現在は岐阜県歴史資料館所蔵の高山陣屋文書の一つとされている。時代は明確ではないが、江戸時代末期の可能性も考えて『飛州志』の次に位置付ける。内容をみよう。

③「飛州下呂温泉畧縁記」

（岐阜県歴史資料館蔵⁽³⁸⁾）

抑我皇^{をす}国内^に温湯^{わか}涌出^す所数多ある中に、此温泉の由来を「尋^{もと}」るに、今の湯の島より半道ばかり辰巳^みに当りて湯が峯といへる所今に有、本此峯^{みわ}の麓^{ふもと}に靈湯涌出けるが、道荆棘^{いばら}をわかち地嶮^{けわしき}岨^{せき}を渡りて、病人往来の苦難ある事を大医王^{しんどう}仏憐^{あは}み給ふにや、天暦年中の頃湯が峯一夜震動し、今の河岸^{ぎし}の湯本に五色の雲^いたなびきて、一夜の間に温泉涌出けると古記に見えたり、然ども諸人其靈湯なる事をしらずして年月を経る事三百余歳、文永二年乙丑十月とかや、白鷺^{さき}一羽足の折れたるが飛^あ来て、かの湯本の中に居^あり居^あり居^あるとみえけるが、忽折れたる足平愈^{ママ}して飛去ぬ、邑



図 7. 「飛州下呂温泉畧縁記」
(岐阜県歴史資料館蔵)

の古老不思議の思ひをなし、鷺の飛行所を追尋ねてこゝろミければ、今の温泉寺山の本陰にとゞまると見えて忽消うせけり、余り奇異の事と思ひ彼鷺のとど満る地を窺ひミれば、木のこぶのごとき仏の尊像にてまします、必や医王善逝此名湯を告しらせ給ふ方便なるをや、かの老人難有思ひて、其所に一字の草堂を構て薬師如来を安置し礼拝しけると伝来の古記に備かなり、其後同郡禅昌禅寺剛山善師今の温泉寺を建立し、あらたに薬師如来の本尊を安置し、且又彼草堂の霊像をもうつし秘仏として入湯信心の族感応のためにおがませける、今の温泉寺に秘在する所の薬師の小尊是なり、かゝる靈験の妙湯なれば、湯治の病人一心に薬師如来を信して此湯に浴せば、などか平復の験なからめや、万世不朽至祝、右の濫觴を略記して湯銘と名付たるのミ

此湯温にして一切諸病悉験あり、第一湿毒疥癬一切湿瘡の類、妙効を得る也、其外痔漏五淋七疝金瘡打撲おのゝ験あり、只癩疽の病のミ終に験あらず、却て害をなす事有之云々、又女人産後或ハ月水の不浄其外汚れたるも〔の〕浴すれば、たちまち温湯わきやミ冷水となる、可慎事也

本文にある「伝来の古記」とは、「湯文之事」を指しているのだろうか。その内容を知っ



図 8. 医王山温泉寺本堂

た上で、さらに湯の来歴を詳しく述べているように思われる。温泉や寺院の「縁起」ではなく「縁記」としているのは、読み物としての軽さを演出しているようだ。ただ、時代設定などにはこれまでとは異なる点が認められる。湯が湧き出したとあった「天曆年中」が、畧縁記では振動の起きた時となっている。また、「文永2年」は白鷺が飛来した年であり、具体的に十月ともある。その間の300年余りは湯の空白期間とあり、これによって湯の在りかを教えてくれた白鷺の存在が強く印象付けられている。おそらく意図してのことだろう。また、白鷺が温泉発見に関与していると綴るのは、菅見の限り本資料が初めてになる。日頃益田川で見かける白い鷺を登場させることで、温泉がより身近で親しみやすいものになり、またその怪我への湯の効能を読み人にわかりやすく伝える効果も生んでいる。

畧縁記は温泉寺で発行されたものと考えられているが⁽³⁹⁾、江戸末期から明治期の頃のものだろうか。内容からは、湯と寺の繁栄を強く願って作成されたものと見做せる。

続いて益田郡役所によって編纂された『岐阜県益田郡誌』の内容を確認する。1916年の刊行である。「温泉寺」と「鉱泉」の項にそれぞれ記載があるため、少し重複するが、順に当たる。まずは温泉寺の項⁽⁴⁰⁾をみよう。

④ a 『岐阜県益田郡誌』

「医王山温泉寺」下呂村大字湯之鳥字湯之平臨濟宗妙心寺派にして、禪昌寺の末寺なり。寺説によれば往古、辰巳に方れる山中の温泉峯と称する処に、温泉湧出せしに、天曆年中に至り忽ち止みて、更に益田川の東岸に湧出せり。是より此地を温泉島と呼ぶ。然れ共諸人其靈湯なるを知らず。年を経て文永二年乙丑十月、足の折れたる白鷺一羽飛来りて、彼の温泉に浴せしが、忽ち平癒して飛去り、今の温泉寺山の樹上に止まりしと見えしが、復、忽にして其の姿見えなくなりぬ。村老奇異の思をなし、其の止れる処を尋ねしに、薬師の像を感得せり。よりにて是を草堂に安置せしを、寛文十一辛亥年中、禪昌寺第八世剛山祖金大和尚一寺を建立して、今の寺号を付す。(後略)

天曆年中に温泉峯の湯が急に止まると同時に、益田川の東岸から湧出したとある。一部は畧縁記と重なる年代である。またこれにより、付近一帯が温泉島と呼ばれる地名由来伝説にもなっている。

その後人に知られることなく時が過ぎ、文永2年10月に一羽の白鷺が飛来し、その傷の回復が湯と薬師如来像の発見につながったという内容である。「寺説」とあったが、本話は内容からみて畧縁記が元になっていると考えられよう。次頁表1が示す通り、時代設定にずれが生じているのは、畧縁記と本話の二つだけである。

次に「鉱泉」の項⁽⁴¹⁾をみる。今の内容の他に、『飛州志』の引用に加えて次の説が載る。

④ b 『岐阜県益田郡誌』

(前略)文永二年の書に依り見るに、建暦年間頃(中略)ならむか、或時一羽の足の折れたる白鷺飛び来り、湯之鳥の里湯の川原現在の温泉湧出箇所に下り、一夜を明したるに負傷の箇所全治し、湯の川原より東方約五町を隔りたる処の大なる松へ飛び去り、其の姿掻き消



図9. 浴場白鷺之湯. 屋根の上に白鷺の風見鶏が立つ



図10. 温泉白鷺乃湯浴場(「下呂温泉絵葉書」岐阜県図書館蔵). 白鷺を思わせる洋風の建物である. 大正15年(1926)落成

す如く失ひたり今の温泉寺薬師堂の東側に近年迄其松在りたり里人不思議に思ひ、曩に飛び下り居たる湯の川原に到り見れば一体の仏像と、温泉の湧出とを発見したり。其仏体は瑠璃光薬師如来の尊像にして、先の白鷺は如来の化身にして湧出の箇所を教示し給ひしものと、里人大に驚き敬ひ、其の尊像を安置するには白鷺の飛び去りたる処こそよけれとて、其の松の傍に草堂を建て安置せり。今の医王山温泉寺瑠璃光薬師如来は其の尊像なり。其の時より湯峯の湯は湧き止みたりと。斯の如く、一夜中に不思議の現はれたるは、是夥多の病人の湯峯に登

表 1 主な開湯伝説一覧表

文献名	時代	湯の泉源	湯脈の変異	新たな泉源	白鷺の登場	薬師如來の感得	人物	温泉寺	備考
湯文之事 (温泉寺蔵)1265	-	山の絶頂 (湯峯)	(如來の功力) 一夜のうちに	川端へ	-	-	-	-	温泉は薬師如來の本性湯の効能と生き方指南(文永2年10月の記)
飛騨國中 案内1746	1316頃か	谷合(小山村の奥) 「大はげ」の字名	430年以前 (移る)	川原へ(湯之嶋)	-	-	-	(開基年不詳)	名湯方々より入湯のもの多く繁盛する
飛州志1759頃(1829)	天曆年中	山中(湯峯)	文永2年(10月) 温泉出止む	山下の益田川の 河原へ	-	口碑(温泉湧出時)湯ノ鳥の樹下に光→薬師像を感得	村民	草堂に安置→寛文中年建立	龍澤山禪昌寺第8世圓山祖金和尚医王山温泉禪寺温泉薬師
飛州下呂温泉畧縁記	-	麓(湯が峯)	天曆年中 一夜振動	河岸の現湯本に 五色の雲(知ら れず300余年)	(文永2年10月)足の折れた白鷺飛来しゆあみ →忽ち平癒	山の木陰に白鷺→消える→仏像	古老	草堂に安置→建立	靈験の妙湯、湯の効能、入浴の禁、禪昌寺圓山禪師が新薬師如來の本尊を安置(靈像は秘仏に)
斐太後風土記1873	天曆年中	高山(温泉峰ユミネ)	310年後(文永2年) 温泉出止む	温泉島へ	-	(温泉湧出時)樹下で薬師像を感得	-	草堂に安置→温泉寺か	(寛文の晩年)400余年を経て荒廃した寺を禪昌寺第8世圓山が再建
a岐阜県益田郡誌 1916 (寺説)	-	山中(温泉峯)	天曆年中 温泉忽ち止む	益田川東岸へ (温泉島)諸人 靈湯を知らず	(文永2年10月)足の折れた白鷺飛来し浴→忽ち平癒	現温泉寺山の樹上に白鷺→消える→薬師像を感得	村老	草堂に安置→寛文11年建立	禪昌寺第8世圓山
b岐阜県益田郡誌 1916 (撰「文永2年の書」)	-	山頂(湯峯)	建曆年頃 止まる→一夜のうちに	湯之鳥の里湯の 川原へ	建曆年頃)足の折れた白鷺飛来し浴→一夜で全治	白鷺東方の大松へ飛び消える→湯の山原で仏像と温泉の湧出を発見	里人	堂宇に安置	白鷺は如來の化身、病人の難苦を如來の効力で救済、白鷺の飛び去った大松の傍に草堂、他に「飛州志」の説等も引用
郷土説本1938	1千年の昔(天曆の頃)	湯ヶ峯	約300年後(一夜) 鳴動→翌朝温泉出止む	益田川東岸へ (現湯ヶ淵付近)	白鷺何度も飛来し一日中立つ(脚に傷)→異様な香りから湯に気付く	中根山麓の樹に白鷺→去る(後に)老樹の根元に薬師像を感得	村人(人々に知らせる)	草堂に安置→寛文11年建立	龍澤山禪昌寺第8世圓山祖金和尚白鷺は薬師如來の化身、温泉寺別名薬師寺・高寺
下呂町誌1974 (撰「郷土説本」)	1千年の昔(天曆の頃)	湯ヶ峯	約300年後(一夜) 鳴動→温泉止	益田川東岸へ (現湯ヶ淵付近)	白鷺何度も飛来し一日中立つ(脚に傷)→異様な香りから湯に気付く	中根山麓の樹に白鷺→去る(後に)老樹の根元の薬師像を感得	村人(人々に知らせる)	草堂に安置→寛文11年建立	龍澤山禪昌寺第8世圓山祖金和尚白鷺は薬師如來の化身、温泉寺別名薬師寺・高寺
わたしたちの町(下呂町郷土説本)1982 (撰「飛州志」と伝説)	天曆の頃(釈には天曆表記)	湯ヶ峯	文永2年(10月) 温泉出止む	山下の現在地へ	白鷺が毎日飛来→川原に湯気	下呂宮土の麓の木に白鷺→湯ヶ淵方面へ去る→金色の光、薬師如來	村人	お堂にまつる→医王山温泉寺建立	如來様が白鷺を使って教えた温泉、湯出時に樹下の光(薬師如來)の説も引用
飛騨下呂通史・民俗 1990	約700年前	山中(湯ヶ峯)	文永2年) 温泉止まる	益田川の川原へ	傷付いた白鷺	薬師如來の出土	村人	-	地名(湯屋街道湯薬師)、屋号(湯屋別荘) *伝説「湯ヶ峯」と温泉項より

るの難苦を助けむとの如来の功力にて、移し給ひし賜湯なりとて、是より益々諸国の病人神仏の奇徳を聞き伝へ、尋ね来り浴するに至れり。

「文永二年の書」というのは、「湯文之事」を指しているのだろう。湯峯に登る病人の苦勞を憐れんだ薬師如来が、一夜のうちに通いやすい川原に泉源を移したという点が共通している。それにより、神仏の奇徳ある霊湯としてみますます多くの人々が訪れるようになったと結ばれている。しかしながら、「湯文之事」には白鷺の一件は記されていない。また、薬師如来像の感得にも触れていない。すでに像は存在していたため、必要ないと考えられたのだろうが、最も古いとされる「湯文之事」が薬師如来の縁起に触れていないため、畧縁記を参考にしたのだろうか。あるいは地域の伝承を取り込んだ可能性もある。13世紀の早い時期に当たる「建暦年間」や、「里湯」の表記も他の文献には確認できない。「天暦」の誤りだろうか。仏像が湯の湧出場所で発見されたとする点も、これまでになく新しい展開である。

本説は白鷺を登場させることで、湯の再発見と如来像の感得という大切な出来事を説明しようとしたのではないだろうか。畧縁記が



図11. 温泉薬師湯浴場（「下呂温泉絵葉書」岐阜県図書館蔵）。こちらは寺を連想させる和風建築である。大正15年(1926)落成。現在はない

寺の関係者の手によるとすれば、この試みも温泉寺の知徳によるものと考えられる。

下呂小学校が1938年に刊行した『郷土読本』にも開湯伝説が載る。本書は授業時に利用することを想定して作られており、当時の小学生が郷土について学ぶ中で、温泉の由来についても学んでいたと考えられる。後の1974年に刊行される『下呂町誌』に掲載されているいくつかの伝説も、本書からの引用だった。該当箇所を確認しよう。

⑤「温泉寺と白鷺伝説」（『郷土読本』⁽⁴²⁾）

（前略）今から凡そ一千年の昔、村上天皇の御代、天暦の頃からあの湯ヶ峰に、どんな病気でも不思議によくきくといふ温泉が湧出てゐました。それで、美濃や尾張はいふに及ばず、遠い国々から、はる ^{ママ} やつて来て湯治をする人が可成たくさんありました。そしてその多くの人々は、殆ど病気全快の喜を得ては帰国してゐたのであります。

ところがそれから凡そ三百年程後、或日のこと、湯ヶ峰が物すごく鳴動し始めました。入湯に来てゐる人々は勿論、村の人々も、其の山の異変に怖れおののき、どうなることかと縮み上つてゐました。しかし幸に、それがたつた一夜のうちに静まりましたが、その翌朝から今まで盛に湧出てゐた温泉がひたりと出止んでしまひました。多くの温泉客の失望はいふに及ばず、村の人々の驚きは一通りではありませんでした。

丁度其の頃のこととあります。或日のこと、脚を傷した一羽の白鷺が何処からともなく飛んで来て、益田川の東岸、今の湯ヶ淵の付近へ舞下りました。そして一日中そこを離れませんでした。翌日もその翌日も同じやうでありましたが、村人は誰もそれに気づくものはありませんでした。しかし、そのうちに誰といふとなくその白鷺のことがうはさにのぼりました。そのうはさを耳にした村人の或一人が、不思議に思つて湯ヶ淵の付近へ行つて見

ると、やつぱりうはさの通り、一羽の白鷺が汀に立つてゐます。つか^{ママ}と近寄つた村人に驚いた白鷺は、羽ばたき強く舞上つて、一たん中根山の山麓にある一樹に翼を休めましたが、すぐ天空高く何処かへ飛去つてしまひました。

白鷺の行方を見送つてゐた村人が、異様な香に何気なく足本を見ました。するとどうでせう、今まで少しも気づかなかつた足本から、渾々として美しい温泉が湧出てゐるではありませんか。

「あっ温泉ツ。」

と、意外なことから意外な所に温泉を発見した村人は、狂人の様に喜んで其の事を村の人々にいひふらしました。ところが不思議なことには、その村人が白鷺の行方を語つた、中根山の山麓にある老樹の根本に、瑠璃の光もまばゆい薬師如来の尊像がおはしますことがわかりました。打続く不思議な出来事に、村の人々は唯驚くの外はありませんでした。そのうちに誰いふとなく。

「あの白鷺は薬師如来の化身であつたにちがひない。」

といふようになりました。そこで村の人々は早速相談して、かの樹下に一字の草堂を建て、そこに薬師如来の尊像を安置しました。これが即ち温泉寺薬師堂の最初だと申します(後略)。

時代設定については大筋これまでのものを踏襲している。天皇の名を挙げ、何年前になるのかを具体的に記し、小学生にもわかりやすくなっている。湯についても「どんな病気でも不思議によくきく温泉」との説明がある。湯ヶ峰から益田川東岸への泉源の移動は、湯ヶ峰の鳴動がきっかけとあり、畧縁記の内容に近い。そしてちょうどその頃、脚に傷を負った白鷺が何度も飛来するようになり、その様子から村人が温泉の存在に気付いて、中根山麓の老樹の根本にある薬師如来像も発見



図12. 益田川と白鷺. 魚を狙っている様子



図13. 「白鷺が見つけた以来一千年 下呂温泉」と記された下呂大橋歩道橋竣工記念碑

する。人々はこの白鷺を「薬師如来の化身」と考え、樹下にお堂を建てて像を安置したのが、温泉寺の始まりだと綴られている。

このように、これまでは暗示するに留めていた白鷺と薬師如来との結びつきが、本書では明確に示されている。おそらく小学生にもわかりやすくしたためなのだろう。近年も小学3、4年生頃に総合学習で温泉の由来を学んでいると聞く⁽⁴³⁾。

この『郷土読本』には、仮名遣い等を改めた下呂町教育委員会による1982年版もある。後半の該当箇所のみ引用する。

⑥「下呂温泉」(『わたしたちの町 げろ 下呂郷土読本』⁽⁴⁴⁾)

(前略) 毎日おなじ所へとんでくる白鷺をふしぎに思った村人が近づいてみると、とびたつたあとの川原には湯気がたつていてそれが温泉であることがわかった。

とびたつた白鷺は、下呂富士のふもとの木にとまったが、やがて湯ヶ峰の方角へとびさっていった。

「白鷺が教えてくれた温泉」と思っていると、白鷺のとまった木のあたりに金色に光るものがあり、それが薬師如来様だったので、「如来様が白鷺を使って教えてくださった温泉だから、体によいにちがいない」となり、じっさいにもよくきいた。

医王山温泉寺がそれから建てられたのだそうです。

こちらも小学校の学習資料として使用されているものである。前書と同様に、毎日やってくる白鷺を不思議に思った村人が温泉の存在に気づき、その白鷺によって薬師如来像のありかも知られたと記されている。ただし、「如来様が白鷺を使って教えてくださった」とあるように、白鷺は薬師如来の化身ではなく使いとして見做されている。また、「だから体に良いに違いない」と温泉の評価にも結び付けられている。

薬師如来像が発見される際に、村人は「金色の光」を見ていた。表1を見れば、同様の光が確認できるのは、『飛州志』のみである。本資料の典拠の一つが『飛州志』であることを考えれば当然だが、『飛州志』には白鷺は登場していない。薬師如来の所在を示すために必要な光だったが、本書では白鷺と光明の二つとなって、より内容が詳しくまた細やかになっている。白鷺が去る方向も、湯ヶ峰の方角だった。

以上、年代順に温泉発見にまつわる伝説をみてきたが、内容にはかなりの揺らぎや変化が認められた。また、表1から読み取れるものは、他にもある。まず、湯ヶ峰の湧泉口の位置の異同が挙げられる。例えば「湯文之事」が「絶頂」としているのに対して、『飛驒國中案内』では「谷合」とあり、『飛州志』や

a『岐阜県益田郡誌』は「山中」、また同書bは「山頂」、「畧縁記」は「麓」、『斐太後風土記』は「高山」だった。かなりのばらつきがあるのがわかる。「絶頂」や「山頂」および「高山」にはそれ程の差はないが、「谷合」や「麓」となると差異は大きくなる。しかし、そもそも湯ヶ峰の「峰」や「峯」は、山の頂や高い山などを表すことを考えれば、山の高い所とみるのが妥当だろう。岩肌に見える箇所も、山の高い位置にある。

また、「湯文之事」と「畧縁記」の二つが特に湯の効能について触れているのは、靈湯の紹介と入湯を勧めるような資料の性質も関与しているだろう。泉源の移動の契機を地鳴りを想起させる振動や鳴動と説明しているのは、「畧縁記」と『郷土読本』、また『郷土読本』を引用した『下呂町誌』だけだった。「畧縁記」が温泉寺と関わるのであれば、「湯文之事」のように薬師如来の御慈悲と説明してもよいと思われるが、これは白鷺を登場させる点にも共通していえることである。「畧縁記」の背後には、作者の科学的な知見や、幅広い層の人々を取り込もうとする制作意図のようなものが垣間見える。

3 温泉に関わる祭りとその変遷

戦後の復興が進められる中で、温泉地の活性化を願って下呂では夏祭りが行われるようになる。その中の一つに「温泉感謝祭」があった。この祭りは旅館協同組合が主催し、温泉寺とも結びつきながら行われてきた。先にみた伝説に、寺が密接に関わっていたこととも関係があるだろう。そしてまた、後に創建される下呂温泉神社でも、温泉に関わる例祭が毎年秋に行われている。温泉にまつわるこの二つの祭りについて、順にみていこう。

(1) 温泉感謝祭

8月1日から4日にかけて行われる夏祭り

は、近年は「下呂温泉まつり」と呼ばれて夏の一大イベントとなっている。2020年度からは、新型コロナウイルスの流行と共に中止や縮小を余儀なくされてきたが、その間も温泉感謝祭などに限っては、関係者による寺での祭事が行われてきた。本年2023年度は、4年ぶりにほぼ従来の形での祭りが実施された。

8月3日の午後に行われる温泉感謝祭は、今年で75回を数える。下呂温泉旅館協同組合作成の葉⁽⁴⁵⁾によれば、この祭りは「万里集九・林羅山祭」の別名も持つ。両氏共に下呂温泉の名を世に広めた人物だった。葉には、両氏と下呂の地に縁のある野口雨情の紹介文が載る。

午後3時過ぎにJR下呂駅から出発した祭りの一行は、下呂大橋を渡って町の主要道路を巡行しながら温泉寺へと向かう。一行の中には温泉寺住職はもちろんのこと、万里集九と林羅山に扮した人物や、旅装束の男女などの姿が見える。白鷺に扮した人も10年程前から2人いたが、今年は諸事情で参加が見送られた⁽⁴⁶⁾。

温泉寺に着いてからの次第は、次の通りである。まず献湯の儀の準備が行われる。白鷺の湯と薬師の湯それぞれの湯元から桶で湯を運んでくるが、近年では薬師の湯は温泉寺境内にある湯掛薬師の湯が使われている。二つの湯を受け取った住職は、それを薬師如来に捧げる準備に入る。今年では本堂前で、2人の女性による下呂踊りの奉納もあった。

次に野口雨情の下呂小唄を一同で奉納し、開式の辞が司会から告げられる。住職による献茶・配膳の儀式が行われ、薬師如来、万里集九、林羅山へ三拝、また一同による合掌礼拝へと続く。住職による読経では、近隣寺院から参列された僧侶と共に、温泉守護を祈願して薬師如来へ向けた読経、般若心経、温泉功労物故者への読経および回向、一同による焼香が行われる。続いて薬師如来御真言を七



図14. 温泉感謝祭. 温泉寺へ向かう一行
(2023年8月3日)



図15. 温泉感謝祭. 温泉寺に到着した白鷺乃湯
(2023年8月3日)



図16. 温泉寺本堂に掲げられた「松に白鷺」の木彫りの額. 伝説に基づいたもの



図17. 温泉寺で行われる温泉感謝祭



図18. 薬師如来に捧げられた2つの湯

回唱え、一同の合掌礼拝、実行副委員長の挨拶、下呂市長などの参列者代表の挨拶が行われる。そして閉式の辞が告げられると、導師達の退堂となる。司会は下呂温泉旅館協同組合の事務局長が務める。

実行委員長の挨拶では、近年の情勢にも触れた上で、温泉や先人達への感謝の気持ちが述べられる。また祭りには、下呂温泉の地みない湯の湧出と発展を願う人々の切実な気持ちが込められているのが伝わってくる。

真夏の暑い最中だが、下呂温泉の旅館関係

者や市を代表する関係者が集い、式が終わると境内の他の場所へ移動して、御齋も行われる。

この温泉感謝祭は、戦後間もない昭和22年(1947)9月1日に、観光祭行事の供養として始まったものである。大戦を経て町の立て直しを進める中で、下呂の町に湧き続ける温泉への感謝の思いは大きかったに違いない。戦争で亡くなった人々への供養の思いがあったことも、当初の祭りの名が「温泉供養」だった点からも窺える。

「観光祭」はやがて「温泉祭り」に変化し、1956年からは「温泉供養」の名も現在の「温泉感謝祭」に改められている。表2の示す通りである。

(2) 下呂温泉神社例祭

歴史ある温泉寺に対して、下呂温泉神社は新しく誕生した神社である。誕生までの経緯は次の通りである。

1989年に旅館協同組合の入る旅館会館が増改築されることになり、下呂温泉の繁栄の源である温泉への感謝を込めて、神社を創建することが決まる⁽⁴⁷⁾。ご分霊を願ったのは、霊湯の湧出する霊岩を御神体と仰ぐ山形県の湯殿山神社であり、委員会を立ち上げて準備が進められることになる。1988年9月4日に理事長以下役員10人と設計事務所の2人の計12人で、新潟経由のバスに乗り、山形は鶴岡までご分霊を願う旅に出る。冬期間に湯殿山神社などの代表となる出羽三山神社で願い出た結果、建物の構造や例祭を八の日にするなどのいくつかの約束事を守ることを前提に、ご分霊が認められたのだった。箱根を越えたことがないといわれる神社のご分霊は、その後も打ち合わせを重ねて、湯殿山神社で執り行われる「湯殿大神を送る神事」と、下呂温泉神社での「湯殿大神を迎える神事」が1989年7月9日から11日にかけて執り行われる。山形から下呂への道中では、御神体

表2 下呂温泉に関わる祭りの変遷

年月日	名称	内容	備考	関連事項
1946年9月1日	花火大会	再開。前日郵便局前にて盆踊り	観光協会主催/ 寄付金	下呂観光協会設立(12月5日)
1947年9月1日	観光祭	温泉供養・宝探し・招宴(温泉寺)・花火大会		
9月2日		地区対抗野球戦。19時から変装盆踊り大会	賞金付	
1948年9月1日	観光祭	狂俳		
9月2日		役場前にて盆踊り		
1949年9月2日	…	子供みこし。夜役場前にて盆踊り		
9月3日	大花火大会			
1950年9月1日	花火大会	観光協会総会・観光協会協賛大演芸会。各区盆踊り		名古屋・下呂間に特別週末列車「やまぼと号」開通／下呂・金山間ロマンスカー開通(町制25周年)
9月2日		雨のため花火中止		
9月3日		風雨のため中止		
1951年8月10日	観光祭			下呂・乗鞍間ロマンスカー開通
1952年8月15日	下呂観光祭			5月8日湯之島中心街大火(森八幡神社大杉焼失)／下呂音頭の歌詞募集(下呂小唄等は昭和初期作成)
1953年8月14日	温泉まつり	全飛オリンピック・花火大会		地質調査／9月14日大洪水
8月15日		狂俳大会・演芸大会・子供みこし・納涼盆踊り		
1954年8月15日	温泉まつり			「中山七里」県立公園に指定
1955年8月15日	花火大会			下呂町・竹原・上原・中原村の合併／商工観光課設置に伴い観光協会の独立／白鷺橋の完成
1956年8月14～15日	温泉まつり	(ミス下呂の選出)・仮装キャラバン・花火大会・仮装盆踊り・子供みこし・芸妓道ばやし・温泉感謝祭	各日の詳細不明	湯河原の採掘で80度の温泉湧出
1957年8月3～4日	温泉まつり	花火大会		温泉会館の完成
1958年9月1日	花火大会	花火大会		7月25日集中豪雨による益田川の氾濫被害→温泉まつりの延期
1959年8月11日	温泉まつり	花火・歌塚まつり・納涼盆踊り・夜市大売り出し		9月26日伊勢湾台風の被害／下呂温泉保護協会設立
8月12日		花火大会・温泉感謝祭・子供みこし・芸妓道中ばやし・仮装キャラバン・盆踊り大会・温泉解放		
		(両日観光写真コンテスト・温泉まつりのスナップ・飾物展示・町内装飾)		
1960年8月1日	観光祭	花火大会		商工会の設立
1961年8月1日	下呂温泉まつり			駅前に旅館組合の観光案内所設置
8月2日		花火大会		
1962年8月1～2日	温泉まつり			湯温の低下
1963年8月1～2日	下呂温泉まつり			飛騨郷土館の開設(白川郷から移築)／旅館組合から下呂温泉旅館協同組合へ
1964年	不明			飛騨・木曾川の国定公園指定／下呂大橋の完成
1965年8月1～2日	…	温泉感謝祭・花火大会・仮装キャラバン・音楽の夕・子供みこし・芸妓道中ばやし・鼓笛隊・狂俳大会・歌塚まつり・湯本まつり・盆踊り大会・千燈会	各日の詳細不明	名鉄「たかやま号」の運行
1966年8月1日	温泉まつり	温泉感謝祭・鼓笛隊・仮装キャラバン・音楽の夕・盆踊り大会・千燈会		8月1日役場新庁舎除幕式・祝賀パーティー(下呂町合併10周年)／旅館の新増築ラッシュ／国鉄大阪ー下呂間臨時列車「のりくら号」毎日の運転開始
8月2日		子供みこし・歌塚まつり・芸妓道中ばやし・湯元まつり・花火大会・盆踊り大会		
1967年8月1日	温泉まつり	子供みこし・芸妓道中ばやし・音楽の夕・狂俳大会	連日の狂俳大会	
8月2日		温泉感謝祭・鼓笛隊・仮装キャラバン・花火大会・狂俳大会		
1968年8月1日	下呂温泉まつり			集中豪雨によるバス転落事故・国鉄高山線不通／高山線特急「ひだ」誕生
8月2日				
1969年8月1～2日	温泉まつり	温泉感謝祭・芸妓花傘道中・歌塚まつり・湯元まつり・盆踊り大会		飛騨郷土館から下呂温泉合掌村へ(竹原文楽の常時公演)

8月15日	花火大会			
1970年8月1日	…	子供みこし.狂俳大会.龍神火まつり.自衛隊音楽パレード・演奏会.ミス下呂発表会.三沢あけみショー.撮影大会など		花火大会の中止(国道の交通規制問題)により新たに龍神火祭りが考案される
1971年8月1日	温泉まつり	温泉感謝祭.龍神火祭り.芸妓みこし.歌塚まつり.盆踊り大会		9月6日集中豪雨大災害/下呂駅に総合観光案内所開設
8月2日		子供みこし.湯元まつり.狂俳大会		
1972年8月1日	温泉まつり	温泉感謝祭.龍神火まつり.芸妓みこし.歌塚まつり.盆踊り大会		大阪・高山間直通「たかやま号」定期列車へ/下呂・高山間定期観光バス運転開始/下呂温泉事業協同組合設立
8月2日		子供みこし.湯元まつり.狂俳大会.下呂中プラスバンド		
1973年8月1～2日	温泉まつり	温泉感謝祭.龍神火まつり.芸妓みこし.歌塚まつり.盆踊り.子供みこし.湯元まつり.狂俳.下呂中プラスバンド	各日の詳細不明	8月1日観光会館完成
1974年8月1～2日	温泉まつり	温泉感謝祭.龍神火まつり.芸妓みこし.歌塚まつり.盆踊り大会.子供みこし.湯元まつり.下呂中プラスバンド.映画と演奏のつどい	各日の詳細不明	温泉集中管理工事完成/爬虫類の森完成
1975年8月1～2日	温泉まつり	温泉感謝祭.子供みこし.芸妓みこし.下呂小鼓笛隊.下呂中プラスバンド.狂俳大会.歌塚まつり.湯元まつり.盆踊り大会	各日の詳細不明	
1976年8月1～2日	温泉まつり(第30回記念)	温泉感謝祭.龍神火まつり.子供みこし.芸妓みこし.下呂小鼓笛隊.下呂中プラスバンド.狂俳.歌塚まつり.湯元まつり.盆踊り大会.警察ふれあい広場	各日の詳細不明	観光審議会スタート/町が老人に週1回温泉旅館を開放
1977年8月1～2日	温泉まつり	温泉感謝祭.龍神火まつり.子供みこし.芸妓みこし.下呂小鼓笛隊.下呂中プラスバンド.狂俳大会.歌塚まつり.湯元まつり.盆踊り大会.警察ふれあい広場	各日の詳細不明	国道41号下呂バイパス開通/国道257号竹原バイパス開通
1978年8月1日	温泉まつり	温泉感謝祭.龍神火まつり.子供みこし.芸妓みこし.下呂小鼓笛隊.下呂中プラスバンド.狂俳.歌塚まつり.湯元まつり.盆踊り大会.警察ふれあい広場.花火大会	芸妓みこしの協賛みこし4台	国道41号下呂バイパス開通につき、花火大会が復活
1979年8月1～3日	下呂温泉まつり			高温の温泉源発掘成功
1980年8月1～2日	下呂温泉まつり			源泉塔完成/河鹿橋完成/駅前の緑地小公園完成/下呂大橋歩道橋完成/竹原トンネル開通/高山本線下呂駅開業50周年/田の神まつり等13件が国の重要文化財に指定
1981年8月1～3日	下呂温泉まつり			34年ぶりの豪雪/草津温泉と姉妹温泉提携/下呂温泉開発協同組合設立/駅前に温泉碑建立/夜の下呂温泉案内ツアー(下呂温泉マル秘の旅)
1982年8月1～3日	下呂温泉まつり			温泉まつり見直し委員会での内容の検討
1983年8月1～3日	下呂温泉まつり			下呂温泉を守る会(対地熱発電)発足/温泉スタンド設置/9月28日益田川25年ぶりに大洪水(台風10号)
1984年8月1～3日	温泉まつり	3日)温泉感謝祭		小島功氏のキャラクター使用/キャンペーン5人選出
1985年8月1～3日	下呂温泉まつり			下呂町合併30周年/温泉スタンド増設
1986年8月1～3日	下呂温泉まつり	3日)温泉感謝祭		年来の温泉ブーム/国際観光モデル地域に高山と下呂が指定/町を上げての観光促進
1987年8月3日	…	温泉感謝祭		王滝村での地熱発電調査終了/カジカガエル/クワガーデン河鹿の湯竣工
1988年8月3日	…	温泉感謝祭		下呂大橋にガス灯/阿多野谷右岸に歩道とガス灯/クワガーデン露天風呂に温泉資料館開館/湯殿山神社視察
1989年10月8日	下呂温泉神社例祭			新型特急「ワイドビューひだ」運行/下呂温泉旅館開館新装(7月湯殿山神社から下呂温泉神社に勧請.鎮座祭)/宿泊客150万人突破
1990年8月3日	…	温泉感謝祭		観光協会「21世紀特別委員会」設置.婦人部設立/新型特急「ワイドビューひだ」運行
10月8日		下呂温泉神社例祭		

1991年8月3日	…	温泉感謝祭		町内案内標識の設置／下呂温泉名産会設立／「湯けむりの森」完成／「プロが選ぶ日本の温泉100選」でベスト10に(観光経済新聞主催)
10月8日	下呂温泉神社例祭			
1992年8月3日	…	温泉感謝祭		白鷺橋上に林羅山像建立(宿泊客150万人達成記念)／8月26日第1回下呂泉都おどり開催／観光課から観光協会事務所の分離
10月8日	下呂温泉神社例祭			
1993年8月1～3日	温泉まつり	花火大会.3日)温泉感謝祭		狛犬博物館開館
8月7日	歌塚まつり 東西歌合戦			第10回
10月8日	下呂温泉神社例祭			
1994年8月2～3日	…	2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 3日)温泉感謝祭		高山本線全通60周年キャンペーン歓迎行事／下呂温泉旅館輸送バス(株)GRB運行／合掌村開村30周年
10月8日	下呂温泉神社例祭			
1995年8月2～3日	…	2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 3日)温泉感謝祭 5日)歌塚祭り		社団法人下呂温泉観光協会へ／峰一合中部山岳考古館からふるさと歴史記念館へ／雨情公園開園
10月8日	下呂温泉神社例祭			
1996年8月2～3日	…	2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 3日)温泉感謝祭		有馬・草津温泉と姉妹温泉提携へ／旅館組合HP開設／6月落石により高山線列車脱線
10月8日	下呂温泉神社例祭			
1997年8月2～3日	…	2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 3日)温泉感謝祭		
10月8日	下呂温泉神社例祭			
1998年8月2～3日	…	2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 3日)温泉感謝祭		
10月8日	下呂温泉神社例祭			
1999年8月2～3日	…	2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 3日)温泉感謝祭		
10月8日	下呂温泉神社例祭			
2000年8月2～3日	…	2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 3日)温泉感謝祭		
10月8日	下呂温泉神社例祭			
2001年8月2～3日	…	2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 3日)温泉感謝祭		12月花火ミュージカル冬公演 5回
10月8日	下呂温泉神社例祭			
2002年8月1～3日	下呂温泉まつり	1日)下呂温泉まつり開始 2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 3日)温泉感謝祭		
8月10日		歌塚まつり		
10月8日	下呂温泉神社例祭			
2003年8月1～3日	…	1日)龍神まつり 2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 芸妓御祈念祭 3日)温泉感謝祭.花火大会		

10月8日	下呂温泉神社 例祭			
2004年8月1～3日	…	1日)下呂温泉まつり開始 2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭.芸 妓御輿 3日)温泉感謝祭		新下呂市誕生
10月8日	下呂温泉神社 例祭			
2005年8月1～3日	…	1日)龍神火まつり祭事 2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 3日)温泉感謝祭		
10月8日	下呂温泉神社 例祭			
2006年8月1～3日	…	1日)龍神火まつり祭事 2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 3日)温泉感謝祭.下呂温泉花火ミュージカル		
10月8日	下呂温泉神社 例祭			11月11日下呂温泉謝肉祭2006秋
2007年8月1～3日	…	1日)下呂温泉まつり:龍神火まつり 2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御 祭.芸妓御輿祈願祭 3日)温泉感謝祭.花火ミュージカル		
10月8日	下呂温泉神社 例祭			11月4日下呂温泉謝肉祭2007秋
2008年8月1～3日	…	1日)下呂温泉まつり:龍神火まつり 2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭.芸 妓御輿祈願祭 3日)温泉感謝祭.花火ミュージカル		
10月8日	下呂温泉神社20 周年記念例祭			11月9日下呂温泉謝肉祭2008秋
2009年8月1～3日	…	1日)下呂温泉まつり:龍神火まつり 2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 3日)温泉感謝祭.花火ミュージカル		
10月8日	下呂温泉神社 例祭			10月25日下呂温泉謝肉祭2009秋
2010年8月1～3日	…	1日)下呂温泉まつり:龍神火まつり 2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 3日)温泉感謝祭.花火ミュージカル		
10月8日	下呂温泉神社 例祭			10月24日下呂温泉謝肉祭2010秋
2011年8月1～3日	…	1日)下呂温泉まつり:龍神火まつり 2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 3日)温泉感謝祭.花火ミュージカル		
10月8日	下呂温泉神社 例祭			10月23日下呂温泉謝肉祭2011秋
2012年8月1～3日	…	1日)下呂温泉まつり:龍神火まつり 2日)下呂温泉旅館協同組合青年部神輿発御祭 3日)温泉感謝祭.花火ミュージカル		
10月8日	下呂温泉神社 例祭			10月21日下呂温泉謝肉祭2012秋

* 本表は、社団法人下呂温泉観光協会編集委員会編『下呂温泉観光50年の歩み 創立50周年記念誌』（同観光協会刊、1997）および下呂温泉旅館協同組合小史編集委員会編『80年の歩み—下呂温泉：組合小史—』（下呂温泉旅館協同組合刊、2013）を元に作成した。

* 「盆踊り」と「子供みこし」関連の表記は、便宜上それぞれ統一した。

を体から一切離してはいけないという決め事が、羽黒三山神社の権禰宜によって守られる。特別に認められた空路での移動は順調に進み、御鎮座祭を経た11日午前11時に、羽黒三山神社の権宮司と二人の権禰宜、主典の四人と、さらに来賓を迎えて下呂温泉神社主催の御鎮座奉祝祭が執行されたのである。

温泉への崇敬の念に加えて、末永い温泉の存続、入浴客の安全と健康増進、先人の労苦に対する感謝、下呂温泉の益々の繁栄を祈願して創建された下呂温泉神社は、町の中央に位置する利便性もあり、その後も旅行者の参拝が絶え間なく続いている。

同年からは毎年10月8日が例祭日とされ、宮司や神職のもと、氏子や崇敬者、来賓の参拝を得て行われている。また、節目の年には湯殿山本宮あるいは出羽三山神社から使者を迎えており、本宮との関係が今も大切にされているのがわかる。

続いて下呂温泉神社例祭の内容を具体的にみよう。コロナ禍の近年は祭りが縮小されており、関係者による神事のみが執り行われていた。このため、雨天によって屋内での開催

となった2019年度⁽⁴⁸⁾と、4年ぶりの本格的な開催となった2023年度⁽⁴⁹⁾をみていこう。なお、2023年度も祭礼日が旅館関係者の忙しい日曜日と重なったため、行列の人数は従来のものに比べると少なくなっている。2019年度の式次第を例に挙げる。

下呂温泉神社例祭進行書

(2019年度・下呂旅館協同組合)

- 9:45 女将の会 下り特急ひだ3号10:15着・上り特急ひだ6号10:27着
お出迎え
- 10:00 写真撮影 総合案内所前にて全体写真の撮影
- 10:15 獅子舞披露 若宮八幡神社神楽保存会による披露(約5分)
- 10:25 参進行列 下呂駅一森八幡神社經由
一下呂温泉神社
1. 山伏
 2. 天狗(猿田彦衣装)
 3. 先導(袴)
 4. 先導付き添い(袴)
 5. 白鷺舞2名・古手舞4名
 6. 社名旗(作務衣)
 7. 大榭(白丁)
 8. 天狗(烏天狗衣装)
 9. 先導(袴)
 10. 先導付き添い(袴)
 11. 万里集九(万里集九衣装)
 12. お供
 13. 巫女
 14. 林羅山(林羅山衣装)
 15. 旅装束
 16. 神職
 17. 日月旗 日(作務衣)
 18. 日月旗 月(作務衣)
 19. 御輿(白丁)
 20. 宮司
 21. 朱傘(作務衣)
 22. 唐櫃(白丁)



図19. 下呂温泉神社. 下呂温泉旅館協同組合の入る建物の1階部分になる

- 23. 神職
- 24. 祭典委員長 (袴)
- 25. 委員長付き添い (袴)
- 26. 神楽
- 27. 太鼓 (法被)
- 28. 五色旗 (作務衣)
- 29. 護衛 (袴)
 - * 参進行列迎え (袴)
 - * 氏子総代 (袴) 神社内

- 10:58 着御祭
 開式の辞 (祭典委員長)
 修祓
 宮司一拝
 開扉
 献饌
 祝詞奏上
 玉串奉奠 (約 14 人)
 撤饌
 閉扉
 宮司一拝
 氏子総代挨拶
 退下
 直会

通常は 11 時から行われる下呂温泉神社での神事に合わせて、JR 下呂駅での女将による旅行客の出迎えから始まる。総合案内所前で関係者の全体写真を撮影すると、若宮八幡神社神楽保存会による獅子舞が披露される。駅前から出発した参進行列は、森八幡神社前を經由して、下呂温泉神社までの道のりを歩いて行く。

2023 年度の参進行列では、湯之島消防後援団による交通整理のもと、4 人の山伏が時折り法螺貝を吹きながら進み、猿田彦(天狗)、袴姿の先導と付き添い、神が宿る大榊や烏天狗などが続く。今年度は衣装の消耗や人手不足などの理由から、白鷺と手古舞い、巫女の姿が見られなかった。万里集九や林羅山など



図20. 下呂温泉神社例祭関係者の集合写真。後ろ右手に 2 羽の白鷺の姿が見える。この日は雨天のため屋内での撮影になった (2019年10月8日)



図21. 下呂温泉神社例祭。巡行する白鷺たち(下呂温泉旅館協同組合撮影)。2013年は神社建立25周年の年

に扮した人々に、旅装束の男女、神輿勢や宮司に神職、祭典副委員長や二組の神楽、太鼓や中学生達による五色旗などが連なる。創建 35 周年に当たる今年、山形の本宮出羽三山神社からの献幣使が特別に 1 人参列した。山伏を思わせるような出立ちだった。

一行は森八幡神社の祭神へ敬意を示して参道を通り、鳥居前を迂回していく。神社の境内に入らずともそれで良いと考えられているようだ。そして獅子が時折り沿道の子供達の頭を囓むそぶりを見せ、厄祓いをしながら白鷺橋へ進む。橋の上では、出羽三山神社の献幣使が下呂温泉神社の神職に山形から携えた幣を託し、いよいよ神社内での神事が執り行われる。神職もいつもより多い 3 人体制だった。下呂温泉旅館協同組合事務局長の開式の

辞で始まり、修祓、開扉、献饌、宮司による祝詞奏上、本社奉幣、献幣使による祝詞奏上、玉串の奉奠、巫女による御鈴祓の儀が続く。御鈴祓の儀は神社の外の人々にも行われた。そして撤饌に閉扉、宮司による一拝と祭典委員長挨拶によって式はお開きになる。今年度は副委員長による挨拶となった。

その後は白鷺橋の上で、樽酒割りと檜杵でのふるまい酒、若宮八幡神社神楽保存会による二組の獅子舞が披露され、三人による芸妓連奉納舞、そして宿泊補助券などの当たりくじも入った千子まきが行われた。千子まきでは、紅白だんごや菓子が用意されている。その後関係者による直会によって一連の行事は終いとなる。

このように、下呂温泉神社例祭は神社と共に新たに作られた祭りであり、神への感謝と絶え間ない湯の湧出を特に祈願する祭りといえる。そこには歴史上の人物である万里集九や林羅山の姿があり、伝説に現われる白鷺もいた。当初は特に祭りの衣装はなかったようだが、次第に整えられていったのである。なお、白鷺の装束は、十年ほど前に浅草の三社祭の白鷺をモデルに作られたという⁽⁵⁰⁾。これらの衣装は、温泉感謝祭と下呂温泉神社例祭で兼用されるようになっていく。温泉に強く関わるこれら二つの祭りが、共に下呂温泉



図22. 下呂温泉神社例祭(2023年10月8日). これから駅前を出発する一行. 神社建立35周年の年に当たり、山形県湯殿山神社からも神職が参列した



図23. 市内の橋には白鷺の姿が施されている所が多い

旅館協同組合の主催で行われてきたのは、温泉と旅館との必然的な結びつきの強さを物語っていると考えられる。

4 下呂市に伝わる伝説と祭り

下呂温泉の発見伝説と祭りを考える上でヒントになる祭りがある。夏の下呂温泉祭りの初日に行われている龍神火まつりである。この祭りは、「椀貸せ淵」の伝説と密接に結びついている。まずは伝説の内容をみよう。

「椀貸せ淵」(『飛騨下呂 通史・民俗』⁽⁵¹⁾)

益田川の清流に沿って、下呂駅より約四キロ下ると、青色に塗った美しい橋がある。橋の上から清流を眺めると、帯雲橋の美しい姿が水に写って、本当にすがすがしい気分になる。この帯雲橋から名称の中山七里となるのである。

この帯雲橋の下に今では、泥水のたまっている所がある。これが昔、椀などを貸したという椀貸せ淵である。この深さを知ることはできないが、この下の横の方に、ぽっかりと穴があいており、この穴は遠く竜宮に通じているといわれている。そして昔は、竜宮の乙姫様の機を織る音が、かすかに聞こえていたそうである。

そのころ里の人々は、お正月や、お盆や、お祭りなどには、お膳やお椀をこゝへ借りに

きたのである。前日に行って必要な数を頼んでおいて、翌朝行ってみると、その数だけのお膳やお椀が入口にちゃんと並べてあったという。里の人々は非常に喜んで、お正月が来ても、お盆が来ても、本当に不自由なしに暮らしていた。

ところがある年のこと、一人の里人がお祭りに借りた大切なお椀を、あやまって一つ割らしてしまった。その里人は非常に心配して翌日、その割れたお椀をあやまりもしないで、入口に置いて、逃げる様に帰ってしまった。ところがそれからというもの、里人がどんなに頼んでも、もう何も貸してもらえないようになってしまった。それ以後、機を織る音さえも、聞こえて来なくなったという。

冠婚葬祭などの特別な時に、人々が求める椀を貸してくれる「椀貸し淵」の伝説は各地に多い。借りた椀はきれいに洗って返すのが暗黙の了解だが、誰かが椀をかすめ取ったり、割った椀をそのままにすると、二度と貸してくれなくなると語られている。遠く竜宮にまで通じているといわれた椀貸せ淵の穴からは、乙姫様の機を織る音がかすかに聞こえてきたとあった。そのような神聖な地での約束事を違えてしまったために、里人はそれ以後は椀を貸してはもらえなくなり、機を織る音さえ途絶えてしまったと結ばれている。神々の静かな怒りと悲しみを感じさせる余韻がある。

「椀貸せ淵」は、下呂の町で語り継がれてきた伝説の一つであり、『岐阜県益田郡誌』などのいくつもの文献に記されている。そしてこの伝説を元に作られた祭りが、夏の龍神火まつりだった。

龍神火まつりは、花火大会が開催できなくなった時に、それに替わるものとして昭和45年(1980)に誕生した。国道が益田川沿いに作られた関係で、5号以上の花火の打ち上げを国から規制されたことに起因してい



図24. 龍神火まつりの記念碑. 中央に「椀貸大龍王」. 昭和50年(1975) 建立

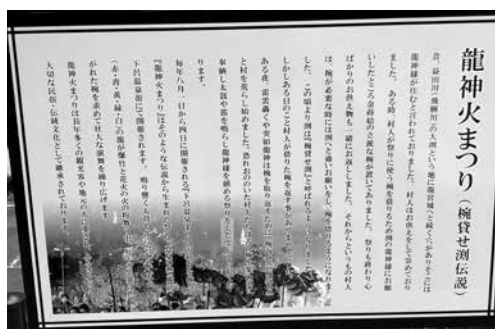


図25. 碑の横に立つ案内板. 祭りの由来となった伝説「椀貸せ淵」の紹介文が記されている



図26. 伝説の地帯雲橋. 奥の青い橋下あたりに椀貸せ淵があったと伝えられている

る。それまでは川原で豪快に打ち上げられてきた大型の花火だったが、観光客に見せられなくなることに危機感を覚えた人々が、青年会議所の役員を中心に案を練り、新たな祭りを創出することになった⁽⁵²⁾。



図 27. 4 年振りに開催された龍神火まつり
(2023年8月1日)



図 28. 龍神火まつりの椀神輿。厄落としのために
担ぐ人々 (2023年8月1日)

祭りを記念する碑が伝説の淵近くに立てられたのは、始まりから5年後の昭和50年(1975)7月のことである。毎年祭りの当日には龍神達が碑の前に揃い、入魂式が行われる。その後地区ごとに分かれた龍神達は、夕方になると町を練り歩いて暴れ、最後は白鷺橋の上で競い合うように勇壮な姿を披露する。赤は小川会の玉殿龍、青は森友会の八幡龍、黄は幸田の幸龍、緑は若宮会の若宮龍、白は大平会の大平龍、さらに戌亥会の椀みこ

し、東和会の鳴り物によって構成されている。以前は酒も手伝って互いに喧嘩をすることもあったという⁽⁵³⁾。

諸事情によって今春町の中心部に移転した碑の近くには、祭りについての案内板が立てられている(図25)。それによれば、椀が返されなかったことに怒った龍神達が、椀を返せと村を荒らすようになり、恐れおののいた村人達が、古い椀を集めて淵に奉納し、笛や太鼓を鳴らして龍神を鎮める祭りをしたという。五つの龍神達が、爆竹を鳴らし火を吹きながら暴れる様は圧巻だが、先にみた伝説とはかなり異なっているのがわかる。通常は龍の前にある玉も、龍神火まつりでは椀の形にアレンジされている。

龍が荒れ狂ったという内容が類話にあるのかを他文献で確認しても、いずれも先の伝説と同じ結末だった。祭りを組み立てていく際に、終わりの部分の展開をかなり改めたようである。

龍神の創作には長崎くんちを参考にしたともいわれ、何代目かになる龍神達は、流麗で華やかな姿ではある。伝説のままでは迫力が足りないために、脚色を加えたようだ。

祭りに登場する神輿もまた、「椀神輿」と呼ばれる漆塗りの重さが1トンにもなるという重厚なものだ。こちらも当初に比べると重さがかなり増している。見栄えのする整ったものにしたことで、神輿にしては重くなってしまったのだろう。これを担ぐのが厄年を迎えた数えで42歳の男性達であり、担ぐことによって厄が落とされると考えられている。

コロナ禍で祭りが中止になっていた間に厄年を迎えた人達は、神輿を担ぐことができずにいる。これについて取材をしている時に、「気の毒なことだ」という言葉が聞かれたが⁽⁵⁴⁾、それだけ祭りが人々の人生の中で重要なものになってきているのだろう。少しずつ祭りが成長し、それと同時に人々の中で祭りに対する思いの強さも浸透しているように感じる。

このように、祭りの創出に地域に伝わる伝説を活用しようとする気質が、下呂の町にはある。温泉感謝祭や下呂温泉神社例祭に伝説の白鷺が登場し、下呂温泉に関わる歴史上の人物が加わっていくのも、温泉町の活性化を願う人々の心意気関わっているだろう。同様の例に「歌塚供養祭」も挙げられるが、これについてはまた稿を改めたい。

5 結び

下呂温泉には、一度途絶えた湯が再び川端で見つかったという伝説があった。そしてその発見の契機となったのが、一羽の傷ついた白鷺の存在だった。この温泉発見伝説は少しずつ成長をしながら、また変化をしながら今に伝わっていた。初めは姿かたちも見えない白鷺だったが、突如畧縁記に現われ大きな役目を担うようになっていたのである。

地元で白鷺の印象を尋ねると、特にあまり意識はしないという意見や、清らかさや神聖さを感じるという意見が聞かれた。白の持つ力が発揮されているようだ。伝説の白鷺についても、白鷺が傷ついているのだなとごく自然に人々に捉えられているようだった⁽⁵⁵⁾。すぐ近くを流れる益田川には時折り魚を探すような白鷺の姿が見られることもあり、地元では身近な親しみやすい鳥のようである。伝説に採用された理由も、おそらくそのあたりにあるのだろう。今では菓子や橋のオブジェにも、白鷺の姿を見ることが出来る。

下呂温泉の歴史的な経緯を辿れば、史資料にあった泉源の川原への移動や、川原に移ってからの度重なる洪水被害など、湯の湧出は決して安定したものではなかった。むしろ不安に感じるが多かったといえる。今でこそ四つの温泉タンクへの集湯や各旅館への供給システムが整っているが、天保8年(1837)から明治初年までの30年余りは温泉の湧出が止まるなど、自然からの恩恵である温泉へ

の絶えることのない恐れのような感覚が残っているように思われる。どの温泉地でもそうかもしれないが、下呂の場合にはその念を強くするような歴史があった。薬師如来の救済によって移されたと伝わる泉源の移動だったが、天災とはいえこれがその後の下呂の人々を苦しめることになったともいえる。

戦後から行われてきた温泉感謝祭は、温泉寺と結びつきながら続けられてきた。また一方で、温泉にまつわる神社が求められ、遠く山形の湯殿山神社から神霊を迎えて下呂温泉神社が創建された。神への感謝と共に絶えることのない湯の湧出が願われている下呂温泉神社例祭は、神社と共に新たに作られた祭りであり、そこには温泉感謝祭同様に、伝説に現われる白鷺の姿もあった。

新たに創出された祭りには、他に地域に伝わる伝説を元にした龍神火まつりがあった。夏祭りの初日に行われる勇壮なこの祭りは、事情があって行えなくなった花火大会に替わるものとして、若者達が作り出したものだった。元になった「椀貸せ淵」の伝説のままでは迫力が足りないため、祭りには脚色が施されていたが、神輿を「椀みこし」とするなどの細かな工夫もなされていた。祭りは時間の経過と共に少しずつ成長し、同時に人々の祭りに対する思いも強まり、生活の中に深く浸透している様子も窺えた。

このように、その時々の変化を柔軟に受け止めながら、祭りの創出の際には地域に伝わる伝説を活用しようとする気質が、下呂温泉にはあるように感じられる。温泉発見伝説にいつしか登場するようになった白鷺が、薬師如来の化身やその使いとされながらも、温泉にまつわる祭りで湯の象徴のように活躍する様は、現代の下呂の町でも継続している。そしてこれらの背後には、下呂の人々の巧みさと、温泉地ならではの弛みない力強さがあるように考えられる。

註

- (1)高木敏雄『日本伝説集』郷土研究社1913年。後に宝文館出版(山田野理夫編1990年)等からも復刻版が刊行されている。同書182～186頁。
- (2)柳田國男『山島民譚集』甲寅叢書刊行所1914年。後に『柳田國男全集』第二卷(筑摩書房1997年)等に収録。同書396頁。
- (3)柳田國男『日本伝説名集』(日本放送協会編・日本放送出版会1950年)253～256頁。
- (4)日本温泉協会編・刊『温泉大鑑』1935年。後に解題改訂版の『日本温泉大鑑』(博文館1941年)が出されている。同書656～681頁。
- (5)甘露寺泰雄「動物の発見伝説に係る温泉の泉質—既存文献と河野調査データの解析を通しての考察—」(『温泉地域研究』18日本温泉地域学会2012年)13～24頁。他に、藤浪剛一「温泉の発見と伝説」(『温泉知識』丸善1938年)や河野忠「温泉発見・開湯伝説から見た泉質と効能に関する予察的研究」(『大分県温泉調査研究会報告』58大分県温泉調査研究会2007年)等が挙げられる。
- (6)山口貞夫「温泉発見の伝説」(『旅と伝説』10-111937年)13～19頁。
- (7)菱川晶子「温泉発見伝説と動物—長野県上田市鹿教湯温泉の場合」(『愛知大学総合郷土研究所紀要』第60輯2015年)。
- (8)森川敏育「下呂温泉の歴史的発展過程について」(桜花学園大学人文学部研究紀要編集委員会編『桜花学園大学人文学部研究紀要』第14号桜花学園大学、2012年)。
- (9)下呂小学校編『郷土読本』(同校刊、1938年)100頁。
- (10)石原哲弥「飛騨下呂石を原材とした石器の研究」(『飛騨史学』第2号飛騨史学会、1981年所載)26～35頁。「下呂ふるさと歴史記念館展示解説シート②峰一合遺跡」などによると、湯ヶ峰流紋岩は通称「下呂石」と呼ばれている。
- (11)青木和夫・稲岡耕二・篠山春生・白藤禮幸校注『続日本紀』5(新日本古典文学大系16岩波書店、1998年)18～21頁。
- (12)下呂町史編集委員会編『飛騨下呂 通史・民俗』(下呂町、1990年)51頁。
- (13)注(8)の文献に同じ、60頁。
- (14)『斐太後風土記(益田郡下呂竹原二郷)』卷之十九1873年(国立公文書館蔵)冒頭。
- (15)伊能忠敬一行が下呂を含む郡上八幡周辺を訪れたのは第8次測量時であり、他には九州の残部と往還路の調査を行っている。文化8年11月25日から文化11年5月3日の時期である。下呂を含めた第113号「郡上八幡」の地図は、現在アメリカ議会図書館に所蔵されている(渡辺一郎監修『伊能図の概説と各図解説(巻別版)』(伊能図大全第6巻)河出書房新社、2018年および河出書房新社編集部編『伊能図探検 伝説の古地図を200倍楽しむ(図書館版)』河出書房新社、2018年)。
- (16)注(12)の文献に同じ、217頁。
- (17)『日本鉱泉誌』内務省衛生局編纂・同局蔵版、1886年(同書中巻複製 橘書院、1985年)299・300頁。
- (18)岡村利平著『飛騨編年史要』(住伊書店、1921年。1980年大衆書房からの復刻版)49頁。岡村の記述は、万里集九の『梅花無尽蔵』からの引用との見解もある(下呂町誌編纂委員会編『下呂町誌』下呂町、1954年)578頁。
- (19)埴保己一編纂・太田藤四郎補『続群書類従・第十二輯下 文筆部』(続群書類従完成会、1989年)987頁。
なお、続く延徳3年(1491)8月にも二十数名で飛騨の温泉に赴き連句に耽ったとあり、飛州の湯島を万里自身が訪れているのがわかる。
- (20)京都史蹟会編『林羅山詩集』上巻(ペリカン社、1979年)36頁。なお本書は、同名一巻本として1930年に弘文社から刊行されたものの複製本である。
- (21)注(17)の文献に同じ、300頁。
- (22)長谷川忠崇著・岡村利平編纂『飛州志』飛騨叢書第1編(住伊書店、1909年)28・29頁。
- (23)岐阜県益田郡役所編纂『益田郡誌』(益田郡、1916年)44・45頁。

- ②4) 上村木曾右衛門著『飛驒國中案内』住伊書店、1917年。本書は高山陣屋の地役人だった著者が延享3年(1746)に書き上げたものである。かすみ文庫から出された同書1987年刊行本35頁。
- ②5) 下呂町史編集委員会編『飛驒下呂 図録』(下呂町、1980年)487頁。
- ②6) 注①7)の文献と同じ、299・300頁。
- ②7) 注②5)の文献と同じ、487頁。
- ②8) 川島武則監修・北条浩編『下呂温泉史料集』(下呂温泉保護協会、1967年)262～269頁。
- ②9) 注①2)の文献と同じ、375頁。
- ③0) 注①2)の文献と同じ、376頁。
- ③1) 注②8)の文献と同じ、262～269頁。
- ③2) 注①2)の文献と同じ、374～387頁。甘露寺泰雄「温泉今昔物語(その26)」(『地熱エネルギー』Vol.25 No.1 新エネルギー財団、2000年所載)も詳しい。
- ③3) 2022年8月3日ならびに2023年10月8日の温泉寺での実地調査時に拝見。
- ③4) 注①2)の文献と同じ、476頁。
- ③5) 注①2)の文献と同じ、51頁。
- ③6) 注②2)の文献と同じ、28・29頁。
- ③7) 横山住雄「下呂・湯之島薬師堂鐘と遠藤盛牧」(『岐阜県郷土資料研究協議会会報』第84号 岐阜県郷土資料研究協議会、2000年所載)7～9頁。
- ③8) 2023年11月1日岐阜県歴史資料館での調査。
- ③9) 下呂町史編集委員会編『飛驒下呂 史料Ⅱ』(下呂町、1986年)解説30頁。
温泉寺や下呂温泉博物館には本畧縁記の異なる刷物の写真があり、そちらには末尾に「飛州益田郡下呂湯島医王山温泉禪寺看司沙門何某版行也」という一行が付されている。「看司沙門」が住職不在の寺の管理等を行う人物を指すことを考えれば、寺の関係者が関与しているのは間違いないだろう。温泉寺は、1807年から1867年まで無住職となっていたことから、この間に作られたとも考えられるが、かなり戦略的な内容にも感じられる。
- ④0) 岐阜県益田郡役所編纂『岐阜県益田郡誌』(益田郡、1916年)473頁。旧字体は新字体に改めた。
- ④1) 同書、520頁。
- ④2) 注①9)の文献と同じ、46～52頁。旧字体は新字体に改めた。
- ④3) 2023年8月3日の実地調査。温泉寺での温泉感謝祭後に1949年生まれの方から聞く。
- ④4) 『わたしたちの町 げろ 下呂町郷土読本 小学校社会科学習資料編』(下呂町教育委員会、1982年)99・100頁。
- ④5) 「温泉感謝祭」の葉には祭りの次第が記されており、祭りの関係者に毎年配られている。見開き2ページのカラー印刷されたものである。
- ④6) 今年度は祭日が日曜日に当たり、旅館関係者には余裕のない日程だった。また、白鷺の衣装は修理が必要な状況にあるとも事務局長から聞いた。コロナ禍で白鷺の衣装が使用されない間に、劣化が進んでしまった模様だ。被り物もある衣装は、真夏に装着するには、暑さと重さがかなりの負担になるともいう。以前は市内の小学生から高校生が白鷺の担当だったが、2019年度の下呂温泉神社例祭では、コンパニオンの女性が務めている。他の祭りの衣装も、温泉感謝祭と下呂温泉神社とで兼用されている。
- ④7) 下呂温泉旅館協同組合記念誌編集委員会編『創立35周年記念誌』(下呂温泉旅館協同組合、1999年)32～35頁。
- ④8) 2019年10月8日実地調査。雨天のため参進行列は行われず、祭事や神事は旅館会館の屋内で行われた。下呂温泉神社も同館の一角に鎮座している。
- ④9) 2023年10月8日実地調査。
- ⑤0) 2023年8月4日実地調査。
- ⑤1) 注①2)の文献と同じ、473・474頁。
- ⑤2) 2022年8月1日・10月8日・2023年8月3日実地調査。龍神を開湯伝説に結びつけた新しい祭りについては、大山琢央の「熊本県菊池温泉の開湯に関するエピソードの利用と展開」(『温泉地域研究』第14号(日本温泉地域学会編・刊、2010年)等)もある。
- ⑤3) 2023年8月2日実地調査。
- ⑤4) 2023年8月4日実地調査。

55) 2023年8月3・4日実地調査。

〔謝辞〕

下呂温泉の調査では、下呂温泉旅館協同組合前事務局長の奥村公平氏、現事務局長村瀬輝行氏、温泉寺住職岩浅宏観氏、温泉寺総代の武川光雄氏、水明館長谷川貢三氏をはじめ、多くの方にご協力をいただいた。心より御礼申し上げたい。また、本稿は愛知大学総合郷土研究所研究費による研究成果の一部である。ここに記して関係各位に謝意を表したい。